

## 2019年度 相模女子大学 点検評価結果報告書

相模女子大学

学長 風間 誠史

はじめに

2019年度における相模女子大学の教育・研究活動等についての点検評価は、2020年3月より施行された「相模女子大学内部質保証に関する規程」に沿って実施した。まず、自己点検評価委員会において、各学科、各研究科、各学部、各事務部（以下、各機関）を単位として、大学基準協会の評価基準に照らした点検・評価を行い、評価結果をとりまとめた後、質保証委員会において各機関に点検評価結果をフィードバックし、必要に応じて改善を指示し、PDCAサイクルが適切に運用されるよう努めている。

本報告書は、質保証委員会委員長である学長の責任においてまとめたものであり、学内外に公表される。

### 1. 点検・評価結果の総括

上記の通り、今年度より新たな点検・評価体制のもと、IR推進室による卒業生アンケート等の分析も参考にしつつ、各学部・研究科および事務部による自己点検・評価が行われ、質保証委員会ですその内容を審議しフィードバックした。

学部については、各学部・学科とも3ポリシー、特にディプロマ・ポリシーを意識した教育活動がある程度定着した感がある。その意味で各学科ともそれぞれの特色を生かしたカリキュラム運営がなされている。それに加えて社会連携・地域連携等の活動や学外のコンテスト等への参加も、学部・学科の特色を生かしながら積極的に行われ、成果をあげている。学生募集も前年度に引き続き堅調で、学部・学科によっては急激な学生数の増加が新たな課題となっている。学習成果の可視化に向けたFD活動も徐々に定着し始めており、全学研修会の参加者の増加、学習支援システム（manaba）の全学的な導入など一定の成果をあげている。課題としては、前年度同様、ICT環境の整備が十分とは言えない点があり、これは結果的に2020年度に入ってからコロナ禍への対応において顕在化してしまった。

研究科（栄養科学研究科）においては、指導体制の充実や学位審査制度の見直しなどが着実に行われている。学生の受け入れについても博士前期課程については一定の成果が見られるが、博士後期課程については課題として残る。

事務部による詳細な自己点検・評価は今回新たな取り組みとなった。点検・評価項目が多岐にわたり、逆に重要項目が見えにくくなっている面があり、質保証委員会として今後の課題である。それでも各項目について、各部署でいねいな点検・評価作業が実施され、本学の教育活動が全体として適切に行われていることは確認でき、一方でICT教育のため

の環境整備、また教職協働体制の充実という課題も明確になった。また、本学の強みである社会連携の取り組みをさらに質的に向上させるという目標も明確になったと考える。

各学部・学科、研究科、そして事務部において、多岐にわたる点検項目にしっかりと対応してもらえたことに感謝するとともに、点検・評価結果を次に生かすいわゆる PDCA サイクルにつなげていくためには、質保証委員会を中心としたより効率的な点検・評価の仕組みの構築が課題であると感じている。今年度は試行的に 2020 年度前期の点検・評価も行った。コロナ禍という非常事態となり、有効性の検証はできなかったが、今後も点検・評価と質保証の効果的な運用に取り組みたい。

<別添>2019 年度点検評価報告書フィードバック（各学部、研究科、事務部門）

## 2. Sagami Vision2020 の全体的な実施状況

学校法人相模女子大学は、創立 120 年となる 2020 年に向けて、総合的な発展計画として Sagami Vision2020 を掲げ、その実現に取り組んでいる。大学・短期大学部に係る具体的な内容は、2015 年度に提示した「中長期基本計画」に示されているが、そこでは大きく 6 つの目標が挙げられ、それぞれについて具体的な施策や改革が進められてきた。この間、ほぼ所期の目標を達成したのものもあれば、社会環境等の状況の変化によって目標そのもの見直しがなされたものもある。以下にその現況を総括する。なお現在は次の中期計画（2021 年度～2025 年度）やヴィジョンを作成中である。

### ① 教育目標の共有と具現化

スローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」や「発想女子」といった本学のブランドは、社会連携といった具体的な教育活動と結びつき、学内外で一定の認知を得た。

### ② 新しい教育体制の確立

新たな教育プログラムとして、社会起業家を育成する専門職大学院「社会起業研究科（MBA コース）」を設置し 2020 年度よりスタートした。

### ③ 教育課程の整備と教育内容の向上

各学科においてカリキュラムの検討が継続的に行われており、共通教育科目の新カリキュラムも軌道に乗っている。教育内容の向上に向けては授業支援システム（manaba）が完全導入され、学習成果の可視化に向けても前進した。

### ④ 学習環境の整備

ラーニングコモンズを設置し、その活用法を試行している。授業環境としては PC や Wi-Fi 環境の整備が喫緊の課題である。

### ⑤ 学生支援の充実

「夢をかなえるセンター」での学生のキャリア形成サポートは充実してきている。学生相談室、保健センターなど、学生の心身の不安に対応する態勢の整備も進めている。

⑥ 入学者増に向けた募集の戦略と戦術を策定

2018・2019 年度と、定員を超える入学者を確保し、全体としての定員充足率もほぼ 100%となっている。

以 上

2019年度 相模女子大学  
学芸学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<学芸学部>点検評価報告書

総括 (200 字程度)	<p>全学科とも、カリキュラム・ポリシーに基づいた教育を行うことができていた。また、学位課程の特性や分野に合わせた単位化を体系的に行うなど、ディプロマ・ポリシーに基づいた成績評価、単位認定が行われたといえる。</p> <p>2018 年度に比して 2019 年度の学生募集は堅調であったが予断を許さない。組織運営や学生支援、社会連携・社会貢献(学園連携)など概ね順調に行われていた。今後も関係各所との情報共有と連携によりさらなる発展が求められる。</p>
2019 年度に認識した重点課題に対する 2020 年度の改善に向けた計画や目標 (200 字程度)	<p>各学科とも 3 つのポリシーに基づき取り組みが行われている。ただし、今後は教育課程の編成と実施方針の整合性や体系性を見直し、カリキュラム・ポリシーと照らし合わせ修正していくことが求められる。また、各学位課程分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の設定や学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握及び評価するための方法の開発は今後の課題である。</p>
総合評価 (S・A・B・C)	A

<学芸学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対するコメント (200 字程度)	<p>それぞれに異なる特色を有する 5 学科であるが、各学科がその特色を生かした教育を行っている。またすべての学科がカリキュラムをより良いものにすべく検討もしくは改定を実施しており、その際、カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーの見直しや確認が行われている。学生の受け入れや学生支援、また社会連携にも学科ごとの特色を生かして取り組んでおり、充実した活動が行われたと判断できる。またメディア情報学科において学生受け入れ状況が大幅に改善したことはこの間の地道な活動の成果と評価したい。</p>
改善事項 (200 字程度)	<p>学部としての統一が難しいところはあるが、学科ごとの多様性を生かして、学部としての FD 活動や学科間の連携を深める取り組みが求められる。なお学科によって教室や機器(パソコン等)環境について不十分な面があるが、これは法人と調整しつつ必要度を精査して対応したい。</p>
総合評価 (S・A・B・C)	A

2019年度 相模女子大学  
人間社会学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<人間社会学部>点検評価報告書

総括 (200字程度)	<p>2019年度は、本学部を構成する2つの学科のいずれにおいても、入学者数が急増した年度であった(前年比:社会マネジメント学科1.7倍,人間心理学科1.4倍)。そのため、以下の2点において困難な状況が生み出されつつある。その1つは、学生一人ひとりに対するきめ細かな指導が難しくなってきたことであり、もう1つは、1授業あたりの適正人数の維持が難しくなってきたことである。これらは、教育の質の低下にも結びつきかねない重要な問題である。</p> <p>また、本学部では社会福祉士と公認心理師の2つの国家資格に対応したカリキュラムを運用しているが、社会福祉士対応カリキュラムは2019年度で完成年度を迎え、本学初の社会福祉士国家試験合格者を輩出することができた。なお、その合格率(30.8%)は全国合格率(29.3%)を若干上回るものであった。他方、公認心理師対応カリキュラムは2019年度から運用が開始されたが、現在のところ、特段の問題もなく順調に進めることができています。</p>
2019年度に認識した重点課題に対する2020年度の改善に向けた計画や目標 (200字程度)	<p>「総括」にて言及した「入学者急増による弊害」を最小限にすべく、2020年度においては、複数教員間での学生情報の徹底した共有化、クラス数の調整、入学者数の適正管理を着実に実施することにより、学生支援体制の強化および教育の質の確保を図っていきたいと考えている。</p> <p>2つの国家資格に関して、社会福祉士対応カリキュラムについては、引き続き安定的な運用を目指す。他方、公認心理師対応カリキュラムは、まだ緒に就いたばかりである。今後、実習先の確保や移行措置対象の学生に対する特別対応など様々な作業が増えていくことになるが、ワーキンググループを立ち上げて適切に対処していく予定である。</p>
総合評価 (S・A・B・C)	A

<人間社会学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対するコメント (200字程度)	<p>特色ある二学科で、それぞれ工夫されたカリキュラムを実践している。入学者数の増加は、特に社会マネジメント学科において地道な募集活動が一定の成果を挙げたものと評価したい。結果的に生じた急激な学生数の増加に対しても、両学科とも適切に対処する姿勢が示されている。人間心理学科において公認心理師課程を導入しカリキュラムが見直されたこと、両学科で導入した社会福祉士課程について、一期目で合格者を出したことは評価できる。</p>
改善事項 (200字程度)	<p>人間心理学科については資格課程の実習等が今後増加すること、また社会マネジメント学科においては、学科の特色である学外で活動する各種プログラムが多いことから、学生数の増加に対して教育の質を落とさない態勢作りが課題となる。</p>
総合評価 (S・A・B・C)	A

2019年度 相模女子大学  
 栄養科学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<栄養科学部>点検評価報告書

総括 (200字程度)	健康栄養学科、管理栄養学科ともに、栄養士、管理栄養士をメインとした体系的な教育課程を整備し、学生の学修状況についての情報提供と意見交換が定期的に行われることで着実な運営が行われている。このような切れ目のない評価（アセスメント）の結果として、改善すべき点が浮かび上がり、具体的な方策が提案されていることも評価できる。アウトカムとして、就職状況、資格取得は評価できる状況にあり、国家試験合格率、教員採用、公務員採用にも安定した成果を上げていることで、さらに向上する目標設定ともなっている。
2019年度に認識した重点課題に対する2020年度の改善に向けた計画や目標 (200字程度)	重点課題には迅速に具体化しており、健康栄養学科では志願者の増加に向けた入試制度の変更、管理栄養学科では履修単位の学年配当見直しなど新カリキュラムの作成を行った。一方で、入学生の初年度教育、適正な入学定員確保（定員の1割超入学）が課題であると認識しており、2020年度には実行に移される見込みである。総合的にみて、両学科ともにPDCAが学科内で機能していると判断でき、学部内で相互評価することでFD活動になると考えられ、実施の準備をしたい。
総合評価 (S・A・B・C)	A

<栄養科学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対するコメント (200字程度)	両学科とも、栄養士課程、管理栄養士課程のそれぞれの枠組みの中で、質の高い教育へ向けた工夫や学生へのサポートを行っており、資格取得状況、就職状況から見ても養成施設としての役割は十分に果たしている。カリキュラムについても検討が続けられており、その際カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーもきちんと意識されている。
改善事項 (200字程度)	健康栄養学科については、4年制での栄養士課程において短期大学部との差別化を含めどう付加価値を付けるかが課題であるが、これには学科のみならず学部としての全体的な議論・検討が必要である。入学定員はほぼ充足しているが、管理栄養学科も含め、数年前と比べると志願者は大幅に減少しており、学生の受け入れや入学後の指導について、学部全体での主体的な取り組みが求められる。
総合評価 (S・A・B・C)	A

2019年度 相模女子大学大学院  
 栄養科学研究科 点検評価報告書に対するフィードバック

<栄養科学研究科>点検評価報告書

総括 (200字程度)	2019年度の研究科の主たる課題は第一に入学者の増加、第二に教育課程の強化と学位審査基準の明確化であった。第一については、2018年度より再開した学部生向けの研究科の説明会を2回に増やし、社会人を対象とした長期履修制度の取り組みの継続、大学院の活動に関する web page の随時更新に努めた。第二のうち教育については、副指導教員制度による研究指導体制の強化を継続。また、研究指導計画を Student Handbook に明文化し、「研究指導計画書」の書式を導入した。学位審査については、ループリック評価表と学位審査にふさわしい修士・博士論文の基準を明確化して学生に周知した。さらに学位審査の質の担保と公正性を保つために審査スケジュールを工夫した。また、2019年度の博士前期課程の入学から修士学位審査において主指導教員が主査にならない体制が正式に適応される。
2019年度に認識した重点課題に対する2020年度の改善に向けた計画や目標 (200字程度)	2019年度に認識された研究科の重点課題は第一に入学数(特に博士後期課程)の改善、第二に教育課程と学位論文の質の向上である。2020年度の改善に向けた計画としては、前期課程の入学者に対し、後期課程に繋がる継続的な特別研究のパスを明確に基本科目の授業や研究指導で示していくこと。また、前期課程のカリキュラム改定により教育課程の見直し、修士論文の質の向上を図るため研究指導体制を強化することを目標とする。
総合評価 (S・A・B・C)	B

<栄養科学研究科>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対するコメント (200字程度)	指導体制の充実や学位審査制度の見直し等、教育課程の改善は着実に行われている。学生の受け入れについてもさまざまな工夫がなされている。
改善事項 (200字程度)	博士後期課程における学生受け入れが大きな課題である。この間進めてきた指導体制の改善をさらに検討することで、前期課程から後期課程への接続を強化したい。
総合評価 (S・A・B・C)	A

2019 年度事務部門 点検評価報告書フィードバック

【事務部門 点検評価報告書】

基準	総括	課題・改善点	総合評価
1. 理念・目的	大学の理念・目的の設定及びその公表については適切に実施している。Sagami Vision 2020 に理念・目的の実現に向けた方針を定めるとともに、認証評価の結果等を踏まえた事業計画書を策定している。	本学のスローガンや独自の取り組みについては、社会における認知度をさらに高めるための工夫が必要である。	A
2. 内部質保証	内部質保証に関する規程を制定し、全学的な体制の整備を進めている。現行の自己点検評価活動は継続的に実施されているが、評価結果に基づく改善・向上の計画的な実施に結びついていない。	2020 年度から内部質保証システムの本格運用を開始し、必要に応じて改善を進めることで、システムの精度を高めていく必要がある。	B
3. 教育研究組織	大学の目的・理念を実現するための教育組織（学部、学科、研究科）及び附置組織（子育て支援センター、教職センター）が適切に設置されている。また、教育組織の定期的な点検・評価及び社会的な要請を踏まえ、新たな専門職大学院課程の開設を決定した。	今後は、内部質保証システムによる点検・評価の結果や、社会的な要請や外部評価等を踏まえ、教育研究組織の更なる改善・向上に努める必要がある。	A

【質保証委員会からのフィードバック】

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
大学の理念・目的の適切性とその周知・公表状況は総括の示す通りだが、今後の中長期の計画について、課題はあるのではないか。	Sagami Vision 2020 以後の大学の方向性についてさらに検討を急ぐ必要がある。	A
内部質保証の観点から自己点検・評価態勢の改善に取り組んでいる段階で、B 評価はまだ不十分という評価であるが、全体としては内部質保証を充実させる方向に進んでいる。	PDCA サイクルを迅速に回すために自己点検・評価の効率化が必要である。	A
学部・学科やセンター等は基本的には総括の通り適切と考えられる。専門職大学院の設置は本学の理念の展開としても、社会的要請への配慮としても積極的に評価してよい。	特にないが、今後とも学部・学科のあり方や展開について検討が必要である。	A

基準	総括	課題・改善点	総合評価
4. 教育課程・学習成果	学位授与の方針、教育課程の編成・実施方針を定め、各学位過程にふさわしい授業科目が体系的に編成されている。WEB シラバスを活用し、授業の目的・到達目標等に加え、本学の理念・目的における授業の位置づけ（見つめる科目、見つける科目）や、授業の方法（アクティブラーニング科目）を明記している。	カリキュラム改定に際しては、大学全体の視点での検証を行う必要がある。学習成果を測定するための具体的な方針や方法が明確に示されていない。授業評価アンケートの測定結果を基にした改善・向上の取り組みが十分に行われていない。	A
5. 学生の受け入れ	学生の受け入れ方針に基づき、学生募集や入学者選抜に関する体制を整備し、適切に実施している。全学入学委員会における点検・評価を行い、入学者選抜及び学生募集等施策の改善を図っている。通信制高校等出身学生を対象に、入学前・入学後に退学を抑制するための方策を講じている。	社会人入学者数を増やすための入試制度の検討や、広報手法等について検討が必要である。入試制度退学者を抑制するための対策について更なる検討が必要である	A
6. 教員・教員組織	大学の理念・目的に基づき、求める教員像を明示し、各学位課程の目的に即した教員を配置するなど適切な教員組織を編成している。全学的なFD活動として授業評価アンケート、FD研修会、授業参観を実施している。	全学的なFD活動に加え、学科の特色に応じたFD活動の進め方について検討する必要がある。大学の将来像の検討に併せて、柔軟な教員組織のあり方について検討する必要がある。	A

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
点検・評価項目が多岐にわたり、また各授業の内容にまで点検・評価を求める部分があり、評価そのものが困難である。本学において3ポリシーの適切性は常に意識されており、基本的な要件は満たしていると思われる。	左記の通り、評価の視点とされているすべての項目を満たすことは必ずしも必要ではない。本学において改善をはかるべき部分は何かを明確にすべきである。	A
総括の通り概ね適切である。ただし定員充足については社会状況など外部要因に左右される部分大きい。	編入学や社会人など、入学者の幅を広げていく取り組みが必要である。	A
基本的に大学設置基準等に基づくとともに、各学科の特性やカリキュラムに即した教員組織となっており、総括の通りである。	全学共通科目など、大学全体の教育に関わる人事を検討する態勢を整備する必要がある。	A

基準	総括	課題・改善点	総合評価
7. 学生支援	学修支援と生活支援の担当部署を統合したワンストップ型窓口の開設や、ラーニングコモンズの設置等を通じて学生支援の充実を図っている。本学独自のキャリア形成支援プログラムとして、地域協働活動・ボランティア活動等の社会貢献活動や、留学・語学研修等の国際教育活動を展開している。	正課の学びを補うための補修教育プログラムについて検討・実施する必要がある。本学独自の取り組みである正課と正課外の連携に向けた具体的な仕組みの検討が必要である。	B
8. 教育研究等環境	学内におけるネットワーク環境及びICT化に係る整備については、計画的な改修に取り組んでいる。バリアフリー化への対応については、必要な設備を順次導入し、環境の整備に努めている。科研費新規採択者や不採択であっても判定により研究費の増額を行うなど研究活動を促進するための取り組みを進めている。	大学のICT化に向けた教育研究基盤整備等に関する方針の策定や、推進体制の整備が必要である。動物実験に関する外部点検評価の指摘事項に基づき、必要な改善を行う必要がある。	B

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
学生支援をどこまで行えば十分なのかというのは難しいが、総括の通り概ね適切に行われている。さらに努力が必要であることは当然であるが、現状は一定の水準にあると評価したい。	4と同様で、本学においてさらに改善すべきところはどこかを明確にしたい。	A
本学の財務状況の許す範囲で、教育研究環境の整備には努力しており、概ね総括の通りである。	今回のコロナ禍対応において明らかになったように、ICT教育に関わる環境整備は優先的に進める必要がある。	B

基準	総括	課題・改善点	総合評価
9. 社会連携・社会貢献	社会連携活動ポリシーの下、市内・県内に留まらず、全国の自治体・団体との連携活動を推進した。また、各活動を学生のキャリア形成に資する活動に位置づけ、「Sagami チャレンジプログラム」として学生に示し、それらの活動に対して夢をかなえるセンターが中心となって支援を行った。	活動が広がり、プログラムが増えることで、各プログラムを維持（支援）するためのマンパワー不足を課題としている。また、今後、ポートフォリオの導入等により、学生が自身の活動や、活動によって身についた力を振り返ることができるしくみづくりを課題としている。	A
10. 大学運営・財務(1)大学運営	大学運営に必要な役職者を置き、教授会、委員会等の組織体制及び権限を明示し、適切に運営している。大学の予算編成及び予算執行を適切に行うためのプロセスや執行体制を有している。	大学教員を対象としたSDに関する方針が策定されていない。毎年の自己点検評価は実施しているが、具体的な改善には繋がっていない。	A
10. 大学運営・財務(2)財務	学園の施設設備、ICT 環境および人事計画等を反映した中長期財務計画を毎年作成し、計画性を持って予算編成を行っている。今年度も学生確保に努めるとともに外部資金の獲得にも取り組んだ結果、財務状況については、事業活動収支については、10年以上収入超過（黒字）を継続している。	引き続き、収入源の多様化に取り組むとともに、寄付金の確保、特に同窓生からの寄付金の受け入れをどう増やしていくかが課題となっている。	A

評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
本学が力を入れている部分であり、総括の通りであるが、より高い評価を与えてよいと考える。	量的な拡充は限界があり、質的な面でなお一層の充実をはかりたい。	S
基本的には大学運営は適切に行われているが、事務体制については検討が続けられており、教職協働についても課題がないとは言えない。	事務職員と教員がともにFDあるいはSDに取り組む態勢が必要である。	B
安定した財務基盤の確立へむけた取り組みと中長期の計画は策定されているが、社会環境の変動は予測不能な要素があり、柔軟な対応が必要である。	今回のコロナ禍に顕著だったように、予期せぬ状況が発生した際に柔軟に対応可能な体制が求められる。	A

評価 S：卓越した水準にある A：概ね適切である B：努力が求められる C：抜本的な改善が求められる